

第4章

改革の新たな夜明け

近代化と苦闘——アフガニスタンのアイデンティティ探求

アマーヌッラー・ハーンの即位

1919年のハビブッラー・ハーン暗殺は、王宮内部の権力闘争の結果として起こったものであった。その息子であり、カリスマ性と改革精神に富むアマーヌッラー・ハーンが、この混乱のさなかに王位に就いた。彼は治世の初めにアフガニスタンの独立を宣言し、国内におけるイギリスの影響力に挑戦した。この大胆な行動はイギリス植民地軍の反応を引き起こし、1919年の第3次アフガン戦争の勃発へとつながった。英軍はアフガニスタン東部および南部国境に軍を展開し、戦闘の主な舞台はこれら国境地帯に集中した。この戦争は、アフガニスタンが外国勢力から主権と自立を勝ち取るための闘いにおいて、歴史的な転機を示すものとなった。

第3次アフガン戦争——主権と承認を求める闘い

1919年5月に始まった第3次アフガン戦争では、戦闘はカンダハール、パクティヤー、ジャララバードの3地域で展開された。イギリス軍は敗北し、1919年8月に締結されたラワルピンディ条約により、英領インドはアフガニスタンの独立と主権を正式に承認した。これはアフガニスタンにとって大きな外交的成果であった。

第1次世界大戦後、イギリス軍は復員の過程にあり、兵士たちの間には本国帰還を望む気運が高まっていた。こうした戦後の状況と、帝国としての戦略的優先順位の再評価が、第3次アフガン戦争の結果と、アフガニスタン主権の承認という結末に影響を及ぼした。

また、ソビエト連邦の成立と、発展途上国の独立運動を積極的に支援・関与するというその外交方針は、世界の地政学的構図に大きな変化をもたらした。それは反植民地闘争を後押しし、新たに独立した諸国家の政治的・経済的発展にも強い影響を与えた。

アフガニスタンとソビエト連邦との外交関係は、1919年4月7日にアマーヌッラー・ハーンがソ連指導者ウラジーミル・レーニンに送った書簡に始まった。この書簡は、第3次

アフガン戦争後におけるアマーヌッラー・ハーンの、アフガニスタンの独立を国際的に確立し、各国との関係を築こうとする広範な外交努力の一環であった。レーニンがこの書簡に対して肯定的な返答を寄せたことで、両国の外交関係が正式に始まった。

ソビエト連邦に加えて、アマーヌッラー・ハーンは日本、アメリカ合衆国、フランス、イラン、トルコなど他国との関係樹立も試みた。

これら諸国の多くは、アフガニスタン独立の承認や書簡への返答に慎重であったが、ソ連との交流は特に重要な意味を持ち、第1次大戦後の地政学的変化を反映するものであった。

アフガン＝ソビエト友好条約

1921年2月28日に締結された最初のアフガン＝ソビエト友好条約は、アフガニスタンの外交史における重要な出来事であり、ソ連との関係強化を象徴するものであった。地域におけるイギリスの影響力にもかかわらず、アフガン政府は独自の外交政策を追求し、各国との友好条約締結や領事関係の樹立を急速に進めた。これにより、アフガニスタンは国際社会において主権国家としての地位と自主性を主張したのである。

長期にわたる交渉の末、アフガニスタンは1921年11月22日にイギリス帝国との間で和平条約を締結した。この条約締結後、アマーヌッラー・ハーンの指導のもとで、アフガニスタンは近代化への道を歩み始め、政治的・文化的・商業的に多くの国々との関係を築いた。

アフガニスタン政府は近代化へと大きく舵を切ったが、同時に強大な隣国——ソビエト連邦とイギリス——との関係において、均衡を保つという難題にも直面した。

ソビエト政府は、アフガニスタンの新たな独立外交政策を歓迎した。一方、イギリス政府はアフガニスタンがソ連とイギリスの間でバランスを取ろうとする姿勢を疑念をもって見ていた。そのためイギリスは、アフガンの政策に影響を与えるため、さまざまな圧力手段を講じた。その一例が、ボンベイ港でアフガニスタン向け武器積荷の押収であった。さらに1924年には、イギリスが国境沿いに住むマンガル族や他のパシュトゥーン部族を扇動して反乱を引き起こしたことが確認されている。イギリスがマンガル族蜂起を扇動したことは明白であり、これに対してアマーヌッラー・ハーンはイギリスとマンガル族の双方を厳しく非難する演説を行った。

近代化の努力と保守勢力の抵抗

保守的勢力、特にギルザイ・パシュトゥーン部族からの圧力を受け、アマーヌッラー・ハーンは 1928 年、パグマンでロヤ・ジルガ（大国民会議）を招集し、自らの改革計画を提示・討議した。この会議は政府にとって、近代化政策への支持を求める機会であった。しかし、この集会は保守派や部族勢力の反発を完全に鎮めることはできなかった。アマーヌッラー・ハーンの改革は、伝統的価値観やイスラームの教義を脅かすものと見なす人々から強い抵抗を受け、最終的に彼の退位を招いた政治的不安定の一因となった。

アマーヌッラー・ハーンの急速な近代化政策は、保守的な部族勢力——特に一部のパシュトゥーン部族——から激しい抵抗を引き起こした。彼らはこれらの改革を、伝統的価値や社会構造に対する脅威とみなした。この抵抗と部族間抗争の頻発が、国王の改革計画の遂行と国家統治の安定に大きな障害となった。

アマーヌッラー・ハーンの欧州訪問と退位

アマーヌッラー・ハーンは 1927 年から 1928 年にかけて 6 か月間の欧州視察旅行に出発し、ローマ、パリ、ブリュッセル、ベルリン、ロンドンなどを訪問した。この訪問は、アフガニスタンの近代化政策への支援を求め、西欧の進歩を視察することを目的としていた。彼は各地で熱烈的な歓迎を受けたが、その一方で国内では急速な変化に対する保守派の不安と、イスラーム伝統への脅威という認識が広まり、不満が高まっていった。イギリスはアマーヌッラー・ハーンの政策に懸念を抱いていたものの、反対の主因は国内の保守的勢力にあった。

帰国後、アマーヌッラー・ハーンは高まる抵抗に直面し、1929 年 1 月、弟イナヤトゥッラー・ハーンに譲位した。しかしイナヤトゥッラー・ハーンの短い統治はわずか 3 日で、ハビブッラー・カラカーニーによって打倒された。

アマーヌッラー・ハーンの退位は、アフガニスタンの近代化努力における大きな挫折であり、その後の政治的不安定の時代を招いた。彼の野心的な改革構想は国家を近代へと導くことを目指していたが、保守的な部族勢力や宗教勢力の強い抵抗に直面した。

このような抵抗は、アマーヌッラー・ハーンの治世に限られたものではなく、アフガニスタン史に繰り返し現れるテーマである。今日に至るまで、アフガニスタンの近代化努力は、根深い部族的伝統文化と強固な宗教的保守主義によって常に妨げられてきた。

アフガン社会の部族構造は、伝統的価値を重視し、中央集権的権力への抵抗を特徴としており、進歩的改革の実施としばしば衝突してきた。同様に、宗教的保守主義も、イスラーム

ム原則と相反するとみなされる変革に対して強力な障壁として立ちはだかった。こうした文化的・宗教的力学により、後の指導者たちも改革と安定の両立という困難な課題に直面することとなった。

アマーヌッラー・ハーンの挫折した改革の遺産は、アフガニスタンにおける伝統への執着と近代化の追求との複雑なせめぎ合いを象徴する痛烈な教訓である。この国が今なおこれらの課題に取り組み続けていることを考えれば、近代化への苦闘は、アフガニスタンが安定と発展を求める長い道の上における中心的なテーマであり続けている。